

野上豊一郎編

註解

謠曲全集

卷二

中央公論社刊

昭和二十四年十二月十日改訂初版◎
昭和四十六年八月三十日 再版

解註・謠曲全集 卷二
定價二〇〇〇圓

檢 印
廢 止

編 者

野上豐一郎

發行者

山越 豐

印刷者

山元正宜

發行所

東京都中央區
京橋二丁目一番地

中央公論社

電話(五六一)五九二一(代)
振替口座東京三四番

解註・謠曲全集 第二卷 目次

修羅物……………一

修羅物について……………三

田村(觀世流)カケリ物……………一五

八島(觀世流)カケリ物……………二七

簸(寶生流)カケリ物……………四三

忠度(金春流)カケリ物……………五五

通盛(寶生流)カケリ物……………六九

經正(金剛流)カケリ物……………八一

俊成忠度(喜多流)カケリ物……………九一

頼	頼	政	(喜多流)	準カケリ物	101
實	盛	盛	(寶生流)	準カケリ物	115
兼	平	平	(喜多流)	準カケリ物	131
知	章	章	(金剛流)	準カケリ物	145
朝	長	長	(金春流)	準カケリ物	159
清	經	經	(觀世流)	準カケリ物	175
巴			(金剛流)	準カケリ物	189
敦	盛	盛	(觀世流)	中の舞物	101
生田敦盛			(金春流)	中の舞物	115
鬘	物	(一)			135
鬘物について					137

東^{とみ} 井^み 江^え 采^{うね} 佛^{はとけの} 夕^{いう} 半^は 芭^ば 梅^{うめ} 雪^{ゆき} 身^み

北 ^{ほく}	（金春流）	大小序の舞物	二三五
筒 ^{づつ}	（觀世流）	大小序の舞物	二四七
口 ^{ぐち}	（金春流）	大小序の舞物	二五九
女 ^め	（金剛流）	大小序の舞物	二七三
原 ^{はら}	（觀世流）	大小序の舞物	二八七
顔 ^{がお}	（喜多流）	大小序の舞物	二九九
蔀 ^{しとみ}	（寶生流）	大小序の舞物	三〇九
蕉 ^{しよお}	（金春流）	大小序の舞物	三一九
	（觀世流）	大小序の舞物	三三三
	（金剛流）	大小序の舞物	三四五
延 ^{のよ}	（觀世流）	大小序の舞物	三五五

野宮 の みや	(寶生流)	大小序の舞物	三五九
楊貴妃 よお き ひ	(金春流)	大小序の舞物	三七三
二人靜 ふたり しづか	(觀世流)	大小序の舞物	三八七
千手 せん じゆ	(金春流)	大小序の舞物	三九九
吉野靜 よし の しづか	(金春流)	大小序の舞物	四一三
住吉詣 すみ よし もあで	(觀世流)	大小序の舞物	四二七
定家 てい か	(金剛流)	大小序の舞物	四三七
鸚鵡小町 おをむて まち	(喜多流)	大小序の舞物	四五一
關寺小町 せきてらと まち	(觀世流)	大小序の舞物	四六三
檜垣 ひ がき	(觀世流)	大小序の舞物	四七七
姨捨 おば ずて	(寶生流)	太鼓序の舞物	四八九
杜若 かきつ ばた	(喜多流)	太鼓序の舞物	五〇一

修
羅
物

修羅物について

修羅物は、能の五種目の第二に位するもので、序・破・急の原則によつて編制された五番の正式の能組——協能物(序)・修羅物(破の前)・鬘物(破の中)・雜能物(破の後)・切能物(急)——に於いては破の初段に該當する。そこには、まだ序の能の名残が幾らか残つて居り、さうして、破の能としてはまだ十分に破的なものになりきつてゐない。謂はば中間的存在である。

純粹の序の能(協能物)の特長は、儀禮的形式と叙事詩的内容を持つところであり、純粹の破の能(鬘物)の特長は、幽玄の表現と抒情詩的實質を持つところにある。その兩者の中間に位する修羅物は、どつちかといへば、破の能の成分の方が多くなつて居るだけに、その形式はもはや儀禮的の標準からは隔たつて居るけれども、概括的に見て、まだ軌範的構成をば十分に保存して居るといへる。例へば、ワキの登場の形式について見ても、原則的には、矢張り協能物の如く、次第で登場することになつて居る。若干の例外として次第が省略されて、名乗を登場詞とするものもあるにはあるけれども。この、名乗をワキの登場詞とする簡略の形式は、鬘物になると更に目立つて多くなる。また、シ

テの登場の形式について見ても、修羅物にはまだ脇能物的な・軌範的な一聲の登場が保存されて、全曲数の約三分の一を占めて居る。さうして鑿物の特色の一つなるシテの呼掛登場に至つては、修羅物には僅か二曲よりほかない。

次に内容を構成する本質的成分を吟味すると、修羅物は、純粹の序の能(脇能物)の本質的成分なる叙事詩的成分と、純粹の破の能(鑿物)の本質的成分なる抒情詩的成分とを、混合的に持つて居るが、これは、どつちかといへば、前者の方がむしろ多量に含まれてある。といふのは、その説話が、主人公(源平の武將)の、戦勝の・もしくは敗亡の経過を物語ることを主として居るための當然の結果でなければならぬ。そのことは、詞章の主要部なるクセに於いて最も端的に現れて居る。もちろん、修羅物には、抒情詩的表現と一致する幽玄の情趣も少からず取入れられてゐるのではあるが、それは大概クセ以外の部分に於いてである。

修羅物の最も獨自的な表現はカケリである。カケリは歌詞を伴はない舞踊の一種で、非常に簡單な動作の中に、それ以上複雑な舞踊をば構成し得ない理由となるものが含まれてある。例へば、中の舞とか序の舞とかになると、主人公もしくは女主人公は、それに依つて作り出される幽玄の雰圍氣の中で遊び戯れるだけの餘裕を持つて居るが、カケリを舞ふ場合には、彼等はそれだけの餘裕を持つべく

あまりに切迫した感情に追ひ立てられてゐるのである。

修羅物のカケリの内容を構成する感情は、修羅道の苦患・もしくは戦闘そのものに驅り立てられる勇躍心である。同じく勝修羅と呼ばれる物の中でも、「八島」「箴」のカケリは前者に屬し、「田村」のそれは後者に屬する。「田村」の主人公は修羅道の苦患に悩まされないから、ただ好戰的勇躍心を見せるのみであるが、「八島」と「箴」の主人公は、どちらも戦勝者ではあるけれども、修羅道に墮ちて苦しんでゐる。それ故に、そのカケリは苦患の情緒に依つて裏づけられてなければならぬ。すべて此の世に於いて鬭諍の罪を敢て犯した者は、戦勝者であると戦敗者であるとを問はず、必ず修羅道に墮ちて苦しまねばならぬ。修羅道は、迷界の衆生がその業果の差別に依つて必然にそのどれかに到るべき六道——地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上——の第四の境界で、其處に墮ちた者は、斷えず瞋心を燃やして鬭諍を續けねばならぬ。「また瞋恚の修羅の敵の責」「箴」と嘆聲を發したり、「今日の修羅の敵は誰ぞ」「八島」と叫んだりするのは、その恐るべき苦患が間斷なく彼等によりがへるからである。第一巻の序説に於いても述べた如く、能の修羅物といふ名稱は、本來、此の心境の表現に對する呼名であるから、カケリのある曲が修羅物としては典型的のものである。

次に、特定のカケリはないけれども、歌詞に伴つてカケリ的の動作をして、修羅道の苦患を表現し

たり、戰鬥に對する勇躍の氣勢を示したりするものがある。これ等は、準カケリ物と呼ぶことができる。

次に、カケリ物でもなく、準カケリ物でもなく、主人公が臺物に於けるが如く純然たる舞を舞ふ曲が修羅物に二つある。「敦盛」と「生田敦盛」で、どちらも主人公は優麗な少年であり、尋常の公達物とするには尙餘りに優麗であるので、假面までも特殊の少年の假面(敦盛・十六・今若)を用ひて、これに優美な中の舞を舞はせることにしてある。これは殆ど修羅物の域を脱して三番目物(臺物)の圈内に入りかけてゐるやうなものである。

以上の標準で修羅物十六番を分類すると、次の如くなる。

カケリ物——田村「八島」・「簾」・「忠度」・「通盛」・「經正」・「俊成忠度」——以上七番
準カケリ物——賴政「實盛」・「兼平」・「知章」・「朝長」・「清經」・「巴」——以上七番
中の舞物——「敦盛」・「生田敦盛」——以上二番。

更に之を主人公の仁體で區別すると、壯年・青年・少年・老年及び女性となる。それを最もよく表現するものは假面であるから、假面に依つて分類して見ると、平太(田村)・「八島」・「簾」・「兼平」・中將(忠度)・「通盛」・「經正」・「俊成忠度」・「知章」・「朝長」・「清經」・敦盛・十六または今若(敦盛)

「生田敦盛」・頼政（頼政）・朝倉尉または三光尉（實盛）・増女（巴）となる。

この内、頼政と敦盛（または十六）の面はその仁體に限つて用ひられる特殊面である。併し、流派に依り、また場合に依つては、「經正」「知章」「朝長」にも敦盛（または十六）の面を用ひることがあり得る。いづれも同年輩の公達であるから、年齢の點から判斷すれば、當然のことである。けれども假面製作上の表現法について見れば、中將と敦盛（十六）との間には、修羅の苦患に惱む公達と詩歌管絃の享樂にそれを忘却する公達との差違が現れて居り、言ひ換へれば、カケリを舞ふ主人公と中の舞を舞ふ主人公との差違が示されてあるから、本來はその差違は保たれるべきである。

また「簾」の主人公が緒顔壯年の平太の面を掛け、「忠度」の主人公が白皙年少の中將の面を掛けるのも、若し歴史的に兩者の年齢を比較すれば不合理なわけである。何となれば、當時梶原源太景季はまだ二十三の青年であつたし、之に反して薩摩守忠度はすでに齡四十を越えてゐたのであるから。併し、能に於いてさういつた史實の詮索は無用にして寧ろ餘計なことである。なぜといふに、われわれは能作者から年少の貴公子としての忠度を想像すべく要求されて居るのであり、さうしてその要求は、藝術家として當然に提出し得べき自由性を持つものであるから。それ故に、此の場合、われわれの理解すべきことは、平太の面を掛ける主人公は武勇にすぐれた將士であること、中將の面を掛け

る主人公は優雅な貴公子であること、それだけでよいのである。

修羅物をその主人公が源平いづれに属するかに依つて分類する仕方がある。その場合、木曾源氏は源氏から區別されねばならぬし、「田村」だけは別格の物としてそれ等のいづれからも區別されねばならぬ。併し、さういつた分類の仕方は一種の道楽としてはとにかく、研究の上においては殆ど無意味に近いことである。何となれば、修羅物構想の根本に於いてはさういつた區別は少しも立てられてなく、源氏方にも朝長のやうな公達が取扱はれてあつたり、頼政のやうな歌道の達人が悲憤の自刎に際しても尙歌道を捨てないでゐたりするのであるから。

同じ意味に於いて、修羅物を勝敗の結果から區別することも藝術の根本義からいふと不必要なことである。「田村」「八島」「箴」の三番が昔から勝修羅として喜ばれたのは、縁起をかつぐ武人階級の迷信的選擇であつて、此の三番に對して能作者が特別の祝言的工作をしてあるわけではない。その内、「田村」はとにかく、「八島」「箴」に至つては、他の曲の主人公たちと等しく、修羅道で刑罰を受けてゐる憐むべき囚徒であることに於いて變りはないのである。われわれの理解すべき大切なことは、戦争に於いては勝つても負けても、一度戦争にたづさはつた以上は、ことごとく修羅道に墮ちて刑罰の苦患を嘗めねばならぬといふ佛教的運命觀の認識にある。それから免れ得べき唯一の方法は、囚徒等

が熱烈な發願心（はつがんしん）を起して彌陀（みだ）の弘誓（くわうぜい）にすがるより外（ほか）はないのである。中には、すでに救（すく）はれて喜んでゐる者（もの）もあれば、救（すく）はれの約束（やくそく）を求めてもがいてゐる者（もの）もある。

その點（てん）は、併（し）し、修羅物（しゆらもの）に於いては紋切形（もんきりがた）の定型（ていけい）になつてしまつて、われわれに訴（うた）へるところは少（すく）ないが、われわれに特殊（とくしゆ）の印象（いんしやう）を與（あた）へるものは、二人（ふたり）つながつて出る戀愛者（れんあいしや）たちである。「通盛（みちもり）」や「清經（きよきよ）」がそれである。前者（ぜんしや）に於いては別（べつ）に死（し）んだ愛人（あいじん）同士（どうし）が一所（いっしょ）になつて弘誓（くわい）の船（ふね）を求めて居（を）り、後（ご）者に於いては一人（ひとり）は死（し）に、一人（ひとり）は生き残（のこ）つて互（たが）ひの恨（うら）みを投げ合（あ）つて居（を）る。これ等は、愛慾（あいよく）の悶（も）えが取（と）り上げられてゐるために、抒情詩（じやうじ）的（てき）の幽玄（ゆうげん）の情趣（じやうしゆ）が優勢（ゆうせい）になつて、修羅物（しゆらもの）の中でも本質（ほんしつ）的に特殊（とくしゆ）な品類（ひんるい）を形（かたち）づくつてゐる。「巴（よど）」は相手（あひて）を舞臺（ぶたい）の上（うへ）に缺（か）いてはゐるけれども、情緒（じやうじよ）に於いてはそれ等に接近（せつきん）してゐる。その他（た）、「忠度（ちゆうた）」「經正（きやうせい）」「俊成（しゆんせい）忠度（ちゆうた）」などは、戀愛（れんあい）ではなく、藝術（ぎゆつ）に對（たい）する愛着（あいじゃく）の執心（しやくしん）を示し、「敦盛（あつもり）」に至（いた）つては更に純粹（じゆんじゆ）に美（び）の世界（せかい）の憧憬（しやうけい）に傾向（けいかう）してゐる。「生田敦盛（いくたあつもり）」では、その上（うへ）に親子（おんあい）の情（じやう）をも取（と）入れてゐる。

次に外形（けいけい）的（てき）の吟味（ぎんみ）に移（うつ）ると、先（ま）づ、修羅物（しゆらもの）は特殊（とくしゆ）の構成（こうせい）を持つ（も）つことに氣付（きづ）くであらう。修羅物（しゆらもの）には場面（ばめん）が一つ（ひとつ）きりないものもある。「經正（きよせい）」「俊成（しゆんせい）忠度（ちゆうた）」「清經（きよきよ）」「生田敦盛（いくたあつもり）」が、それは例外（れいぐわい）であつて、原則（げんそく）としては二つ（ふた）の場面（ばめん）で成立（せいりつ）してゐる。その點（てん）、脇能物（わきのうもの）に似（に）てゐるやうであるが、脇能物（わきのうもの）の第二場（だいに）